

論 文

日本語学科におけるアクティブ・ラーニングの取り組み

—外国語学会日本語部会「教職プロジェクト」の活動から—

Implementing Active Learning in the Department of Japanese

—from the “Teachers training project” activities Of the Foreign Languages Study Society, Japanese Language Section—

藏中しのぶ

Shinobu KURANAKA

Key words : アクティブ・ラーニング, 中高大連携, 卒業生教員ネットワーク

はじめに

平成27年(2015)11月21日, 外国語学会日本語部会教職プロジェクト主催「卒業生教員シンポジウム」が, 板橋校舎多目的ホールで開催され, 日本語学科の卒業生教員をはじめとする現職教員11名, 大学院日本言語文化学専攻大学院生, 日本語学科学生72名が集まった。

教職プロジェクトの行事(教育実習直前・直後講座, 授業見学)の締めくくりが, 教員になる夢を叶えた卒業生が毎年一同に会すこのシンポジウムである。平成27年度(2015)の基調講演は, 卒業して教壇に立ったばかりの平成26年(2014)卒の埼玉県立吹上秋桜高校工藤瑞紀非常勤講師「定時制高校で働くということ」, 鴻巣市立笠原小学校木村夏織非常勤講師「なぜ, 今, ティーチングアシスタントが必要とされるのか」に加えて, 群馬県立みどり中学藤原知身教諭「アクティブ・ラーニングについて」であった。

会場には, 代々, 「教職プロジェクト」を支えてきた卒業生の先輩教員のほか, 卒業生教員が勤務校で呼びかけた他大学出身の現職教員の姿もみえ, 教育現場における新任の中高現職教員の問題意識, また, アクティブ・ラーニングの取り組みや意識について, 活発な議論が繰り広げられた。

外国語学会日本語部会「教職プロジェクト」

外国語学会日本語部会「教職プロジェクト」は, 日本語学科の教員志望の学生たちの要望に応じて, 平成13年

(2001)に発足した。筆者が着任した平成11年(1999)当時, 外国語学会日本語部会は, 行事ひとつ行われておらず, 予算消化もされていない状況にあった。当時の学科主任・柏木成章教授の委嘱をうけて, 日本語部会の活動を活性化することになり, 「日本語学科新入生オリエンテーション」に日本語部会の学生が参加して新入生の指導をおこなうなど, この時期に現在の日本語部会の体制の基盤が築かれていった。その先駆けとなったのが, 日本語部会のもとに発足した「教職プロジェクト」である。その歴史的経緯は, 『大東文化大学日本語学科20周年論文集』(日本語学科, 2013年1月25日発行)に詳しい。

「教職プロジェクト」の目的は, 「中学・高校の国語科教員になる夢を叶えること」にある。入学式直後の「日本語学科新入生オリエンテーション」の時点では, 新入生の大半が日本語教師か, 中学・高校の国語科教員を志望しており, 教職課程を履修する。教職課程で学ぶ内容は, 必ずしも教員養成に特化されるものではなく, 社会に生きるひとりの人間としても必要な知識であり, 教職課程履修は有意義であり, 好ましい傾向である。その一方で, 当時からすでに, 教職課程委員会では, 教育実習生の意識の低下が問題視されるようになってきていた。

日本語学科の学生たちは, 教育実習に強い不安を覚え, 自ら勉強する機会を求めて, 「教職プロジェクト」を立ち上げた。国語科教員に必要な教職課程や日本文学の専門的知識を幅広く学ぶために, 教職志望の学生が自主的に集まって「教職勉強会」を行うとともに, 現職教員と

の交流を通して、教育実習と教員採用試験をめざして学ぶ機会をつくったのである。

近年、教育実習の現場では問題が種々生じている。教育実習先で起こるさまざまなトラブルを未然に防ぐためにも、「教職プロジェクト」は、直近の課題を教育実習に置き、その先に中学・高校の国語科教員になるために必要な力を養うことを目的として、現在、「教育実習直前講座」「教育実習直後講座」、「卒業生教員シンポジウム」という3つの行事を行っている。

活動に際しては、学生たち自身の手で、日本語部会のスケジュールにあわせて、行事計画と予算案を作成し、日本語部会の予算を確保する。行事の実施に際しては、行事ごとに「お知らせプリント」を学生たち自身の手で作成し、出欠を確認、そのプロセスで、講師との連絡、プログラムと司会の流れの確認、会場の準備、配布資料の手配、懇親会の準備などを行う。当日の司会進行も、学生たち自身が行っている。行事が終われば、会計報告と報告書を作成し、さらに、日本語部会に年間の決算報告、報告書を提出する。

こうした「教職プロジェクト」の学生たちの主体的活動を、筆者はアクティブ・ラーニングの実践活動と位置づけて指導している。

日本古典芸能・日本美術に触れる

中高の国語科教員には、授業の場以外にも、歌舞伎や文楽などの伝統芸能や日本美術の鑑賞に生徒を引率する機会がある。そのための教養をどのようにして身につけるのか。

かつて、「教職プロジェクト」では、旧「日本文化プロジェクト」の行事を引き継いで、「歌舞伎講演会」「歌舞伎鑑賞会」をセットで実施していた。本学卒業生の歌舞伎演出家、松竹の今井豊茂氏を招聘し、歌舞伎鑑賞のための「講演」を聴講し、そのあとで、「歌舞伎鑑賞会」として歌舞伎座等で舞台を鑑賞するというものである。プロの演出家になるまえには、私立中学・高校の教諭の経験をもつ今井氏の講義はたいへん熱のこもったわかりやすいもので、歌舞伎役者の隈取りを何枚も持参して、学生たちに見せてくださるなど、充実した内容であった。

現在は、「日本文化プロジェクト」が、日本語学科の科目「日本文化特別演習」のその道のプロの非常勤講師の先生方の御協力のもと、「日本文化特別演習」の授業内容を内実化し、現場でホンモノに触れて体感するため、アクティブ・ラーニングを意識しながら、3つの行事を

おこなっている。

平成27年度から「日本文化特別演習」をリニューアルした。前期は、「舞台芸術論と洋舞」（菅野友巳非常勤講師）と「日本舞踊」（花柳楽彩非常勤講師）の実習を通して、洋舞と日舞の身体の動きや舞台表現の東西文化の比較を体感するとともに、「長唄三味線」（杵屋喜太郎非常勤講師）の実習を行う。後期は、「茶道」（藏田明子非常勤講師）、「日本美術鑑賞」（菅野友巳非常勤講師）、「華道」（高橋華風非常勤講師）の実習を行っている。

こうした授業内容をさらに深めて内実化させるために「日本文化プロジェクト」は次のような行事を行っている。

前期4月、「日本舞踊」の花柳講師の提供により、花柳流の一門会「錦会」を無料で鑑賞する機会をいただき、今年は28名の参加者があった。時期的に授業開始前なので、これから「日本文化特別演習」で習う日本舞踊がどのようなものであるかを理解する機会と位置づけている。

7月には、「舞台芸術論」の菅野講師のコーディネートにより、国立能楽堂の御協力をいただき、「能・狂言鑑賞会」を実施している。今年は7月28日、参加者は36名であった。当日の能・狂言のレクチャーの後、能・狂言の舞台箏曲「竹生島」、能「竹生島」「女体」（種田道一）「道者」、狂言（野村萬斎）を鑑賞。終演後には、国立能楽堂吉成大四郎氏の解説で、能役者のように鏡の間から能舞台に登場したり、舞台上で能面をつけたりする体験とバックステージ・ツアーを行った。

後期には、「日本美術鑑賞」の菅野講師のコーディネートにより、授業にさきだって、菅野講師のレクチャーと東京国立博物館平常展・法隆寺館見学を行う。これを踏まえて、「日本文化特別演習」の授業では、見学した展示品のなかから、好きなものをひとつ選んで、学生たちに博物館でのリーフレットを作成させるというアクティブ・ラーニングを予定している。

その成果は、秋にはいつてから、日本舞踊・長唄三味線のお稽古を経て、11月の大学院日本言語文化専攻主催「東西文化の融合」国際シンポジウムにおいて、外国語学会日本語部会「日本文化プロジェクト」の「日本伝統文化公演」として、日本舞踊・長唄三味線「菊づくし」実演というかたちで発表の機会を設けている。

中学・高校授業見学

「中学・高校授業見学」は、平成14年度（2002）板橋区立赤塚第三中学校で「中学校見学」、平成15年度（2003）からは大東文化第一高等学校で「高校授業見

学」を実施した。その後、武蔵越生高校の全面的な御協力のもと、「武蔵越生高校授業見学」を行ってきた。今年度より、本学の「大東ウオーク」の行事が「東松山新入生歓迎行事」に変わり、高校の授業期間中に全日休講の日がとれなくなったため、実施していない。

武蔵越生高校は大東文化大学への進学者が多く、大東出身の教諭4名を擁する。「教職プロジェクト」は、そのひとり、岩上克己先生の熱心なご指導をいただいていた。現在、武蔵越生高校には、本学大学院日本語文化学専攻前期課程修了の上田安津子常勤講師が勤務しており、おふたりから多大なお力添えをいただいた。

教育実習直前講座・直後講座

教職プロジェクトの前期の行事は、「教育実習直前講座」「教育実習直後講座」である。この講座は、学生の強い要望から生まれ、「教職プロジェクト」発足のきっかけになったものである。

「教職プロジェクト」が発足した平成13年度（2001）から準備をはじめ、平成14年度（2002）から毎年欠かさず継続している。当初は日本語部会の行事であったが、他学科にさきがけて、数年前から、日本語学科主催とし、日本語部会の共催行事として実施している。

「教育実習直前講座」は、6月に実施する。これから教育実習にいく4年生が指導案を作成して模擬授業を行い、現職教員に事前に送付し、模擬授業を指導していただく。

当初は、大東文化第一高等学校、武蔵越生高校の教諭を招聘していたが、現在では、「教職プロジェクト」から巣立っていった卒業生教員が、講師として指導にあっている。学科予算から拠出される講師料は、今年度、中学・高校合わせて1名分に減額されたが、卒業生教員6名がボランティアで指導に駆けつけ、中学・高校両方の教育実習の指導をすることができた。

7月には、教育実習を終えた4年生が、「教育実習直後講座」で、実際に実習校で作成した指導案を配布し、その授業を模擬授業として行う。

例年、実習生の「直後講座」での模擬授業は、「直後講座」と比較して、格段に向上している。「直前講座」と「直後講座」を通して、2度にわたって指導案を作成し、模擬授業を行い、同じ講師が指導することによって教育効果を高めている。また、3年生以下の学生たちにも、自らの教育実習に対する姿勢、心構えを育成する機会となっている。

なお、「直後講座」は、「教育実習報告書」を書くため

の事後指導の役割を果たしており、この講座の内容を踏まえて、「教育実習事後報告書」をまとめ、ゼミの指導教員の確認と捺印を経て、教職課程軸室に実習生が各自提出している。

平成28年（2016）7月16日、板橋校舎で開催された「教育実習直後講座」では、講師として、卒業生の埼玉県八潮市立八条中学校森裕嗣教諭が「アクティブ・ラーニング―「教える」から「学ぶ」へ―」と題して、「講義を聴く」活動から、「書く」「話す」「活動する」へというアクティブ・ラーニングのミニ講演をおこなった。

森教諭が勤務する八潮市立中学校では、アクティブ・ラーニングを実践するために、「八潮スタンダード」という「学習の流れ」が設定されている。その趣旨、内容は実に具体的であり、成功例、失敗例の事例の分析を通して、中学校の教育現場でのアクティブ・ターニングの取り組みを知る貴重な機会となった。

「教職講演会」から「卒業生教員シンポジウム」へ

冒頭で紹介した「卒業生教員シンポジウム」は、平成14年（2002）、「教職講演会」として発足した。中学校・高校の現職教員になった卒業生を講演者・パネリストとして招聘している。

教育実習と教員採用試験合格をめざす大東生に向けて、学習指導・生徒指導といった教育現場の実際、教員採用試験の対策のほか、国語科教員としての教科の専門知識を養う話題を提供している。

現在では、講師も「教職プロジェクト」から育っていった卒業生教員が担当するようになり、「卒業生教員シンポジウム」というかたちに発展した。毎年1度、「教職プロジェクト」で活動してきた卒業生教員が10数名集い、順番に講師をつとめ、ホームカミング・デーのようなあたたかい雰囲気の中で、活発な意見交換が行われる。

「卒業生教員シンポジウム」には、もうひとつの意義がある。「教育実習直前講座」「直後講座」、また、「授業見学」をはじめ、日頃、後輩たちのために尽力いただいている卒業生教員みずからの学びの場として、母校を活用していただくために、卒業生教員自身が、教育現場で直面している問題をテーマにとりあげていただいている。

まだ「教職講演会」として実施していた頃、アクティブ・ラーニングがこれほど盛んになる以前の講演会で印象に残っている講演がある。群馬市立みどり中学校藤原知身教諭の「『走れメロス』の良い人ランキング」と題した講演である。講演とはいえ、きわめて実践的なもの

で、藤原知身教諭は、聴講している大東生をグループに分け、グループワークとして、『走れメロス』の登場人物を列挙させ、「良い人ランキング」を作成させた。学生たちは、さまざまな論理で、「良い人」の順位付けをおこなった。意外な登場人物を上位にランキングするグループもあり、このゲームのような「言語活動」に、学生たちは熱心に取り組み、『走れメロス』という作品の読みについて、熱い議論が交わされた。

卒業生教員による講演は、中学・高校の教育現場から遠く離れた筆者にとっても、近年の教育界の新しい動きを学ぶ貴重な機会となっている。

平成27年度「卒業生教員シンポジウム」

平成27年度（2015）11月21日に実施された「卒業生教員シンポジウム」は、板橋校舎多目的ホールで開催され、現職教員11名、大学院日本語文化学専攻院生、日本語学科学生72名の参加があった。

学生たちにとって、「教職プロジェクト」の行事の締めくくりが、教員になる夢を叶えた卒業生が毎年一同に会すこのシンポジウムである。「教職プロジェクト」の最上級生は、中学・高校の非常勤講師を勤めながら、大学院に通う大学院生である。彼らを軸に、院生・学生たちは講師と連絡を取りつつ、テーマを定め、プログラムを組み、「おしらせプリント」の作成と配布、当日の会場設営と運営、懇親会の準備をおこなう。当該年度は、大学院日本語文化学専攻博士前期課程2年岡野容之（川崎市立中学校非常勤講師、現・川崎市立中学校臨時的任用教員）が軸となり、大学院博士前期課程1年相澤孝成（大東文化大学日本語学科ティーチング・アシスタント、現・埼玉県中学校初任者研修非常勤講師）をはじめとする教職プロジェクトの学生が準備にあたった。

今年の基調講演は3本、平成26年度（2014）卒の埼玉県立吹上秋桜高校工藤瑞紀講師「定時制高校で働くということ」、鴻巣市立笠原小学校木村夏織副担任「なぜ今」、「教職プロジェクト」草創期の群馬市立みどり中学校藤原知身教諭「アクティブ・ラーニングについて」である。

木村夏織講師が副担任をつとめる小学校のチームティーチングでは、主に授業を進める先生を「T1」、その他の先生を「T2」と呼ぶ。「T1」はメインティーチャー（「MT」）、「T2」はアシスタントティーチャー（「AT」）と呼ばれることもある。小学校では、児童を補助するためにアシスタントティーチャー等を取り入れる学校が増えている。しかし、どの公立小学校にもこの

ような先生が配備されているわけではなく、自治体によってかなり違いがある。また、中学校でも、アシスタントティーチャー等を取り入れている学校がある。

木村講師は、「小学校のT2として働く」という自らの体験にもとづいて、副担任とアシスタントティーチャーの仕事の内容を紹介し、①小学校の免許を持っていないとも小学校で働く場合があるということ、②自分が授業をするのではなく、他の先生方の授業を補助する仕事があることを後輩に伝え、卒業後の進路選択の幅を広げてもらいたいという趣旨で講演された。

さらに、在学中、「教職プロジェクト」の立ち上げに尽力された群馬市立みどり中学藤原知身教諭が「アクティブ・ラーニングについて」と題して、群馬県教員研修で発表したアクティブ・ラーニングを紹介した。群馬県では、藤原教諭のメソッドを実際に授業のなかに採用することになったそうである。

その後、パネルディスカッションが1時間にわたって行われ、現職教員と院生・学部生とのあいだで活発な討議が交わされた。工藤瑞紀講師の同僚で、埼玉県立吹上秋桜高等学校で多文化共生推進員として留学生のティーチング・アシスタントをつとめる青木典子教諭、英語科教員で埼玉県からオーストラリアの高校に1年間出向し、日本語教育にも関わった経験をおもちの川口市立県陽高等学校青木教頭の参加もあり、貴重な意見をいただいた。

日本語学科卒業生教員ネットワーク

「教職プロジェクト」の活動は、平成13年度以来、中高・大学の先生方に支えられ、院生・学生の主体的活動によって継続発展してきた。その歩みの中で、日本語学科から22名の卒業生が現職の教員として巣立っていった。さらに、日本語学科卒業生・日本語文化学専攻前期課程修了者20数名が、東北師範大学、中山大をはじめ、中国の大学の日本語・日本文化担当教員（外国人教師）として赴任していった。中国の大学の教員採用には、日本の教員免許が必要である。進路に迷う学生には、「教職プロジェクト」と「日本語教師プロジェクト」両方の活動に参加することを奨励している。

こうした卒業生教員ネットワークが、今、外から「教職プロジェクト」の活動を支えている。学生たちにとって、教員や日本語教師になった先輩がしばしば母校を訪れ、指導にあたってくれることは、たいへん良い刺激となっている。教員志望の学生たちは、こうした先輩たちの後に続こうと、教壇に立つ日を夢見て日々努力を続けている。